

# イントロダクション フィールド映像術

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二

## フィールドと映像の現在

本書のテーマは、さまざまなフィールドにおける映像の活用法を紹介することを通じて、新たに拓かれつつあるフィールドワークの可能性と課題を提示し、共有することである。本書における映像とは、写真（静止画）およびフィルムやビデオ（動画）のことを指す。

今日、映像機器を持たずに調査に出かけるフィールドワーカーはどれくらいいるのだろうか。映像機器を用いないことよって挙げられる成果というものがあれば、それはどのようなものなのか。フィールドワークと映像をめぐる貴重な論点は、むしろそこにあるようにすら思える。それほど、フィールドワークにおける映像の活用は普及している。活用とは、論文を執筆するデータとして映像を使っているという意味だけではなく、研究成果を挙げるうえで映像を役立てているという意味を含む。たとえば、フィールドワーカーが論文を書く際に、フィールドのことを想起しないということはないだろうし、そのイメージが、フィールドで撮影した映像の影響を受けていないということも、まずないだろう。また、学会発表や大学の講義、一般向けの講演において、映像を用いずに研究成果を紹介

するということもないだろう。そもそもフィールドワークとは、フィールドにおける出来事を記録することであり、そのうえで映像は有用な手段である。実際に、研究用ではない、人に見せるためではない、などと言いながら、多くの研究者がフィールドで撮影し、その映像を活用している。フィールドワーカーの間で、映像がかつてないほどに普及している現在、調査・研究と映像とのかかわりについて認識を深め、積極的に考える必要性が高まっていると言えるのではないだろうか。本書の一つの目的は、そのような現状の認識と問題意識を喚起することである。

歴史を振り返れば、学術と映像は切っても切れない間柄であることがわかる。写真は19世紀後半の、測定し識別するという科学的な見方と結びついていたし、映画はその前史において、肉眼ではとらえることのできない人間や動物の行動を記録し、解明したいという学術的な動機をもっていた。また映画は誕生とともに、さまざまな生活文化や自然現象を記録し、上映を通じて多くの人びとが知識や経験を共有するメディアとして活用されてきた。人類学においては、映画誕生の3年後（1898年）から、フィールドワークに映画用のカメラが採用されている。以来、1920年代、1960年代に実現した映像機器の小形化によって、また1990年代の情報・通信のデジタル化などの技術革新によって、映像の活用は格段に容易になり、学術的な利用も飛躍的に増加して今日に至っている。とくに2000年代以降にあつては世界中の人びとが映像を制作し、インターネットなどを通じて日々刻々と配信・公開し、膨大な映像を視聴するようになってきている。このような時代におけるフィールドワークや研究はどのようなものでありうるのか、またあるべきなのか。本書の執筆者は、自らのフィールドにおける経験を詳細に記述することによって、新

たな時代における「フィールド映像術」の可能性と課題を提示している。

## 本書の構成

本書は、理論編、制作編、応用編という構成になっており、最後に映像術にかかわる情報を共有する目的で座談会を付している。

Part I の理論編には、映像についての歴史的、理論的な理解と、映像制作のプロセスについての構造的な理解が得られる論者が収録されている。第1章(箭内匡)では、私たちの思考において言葉とイメージが分かちがたい関係にあることを確認したうえで、映像を用いた研究が、言語的思考にとらわれがちな学問的実践をイメージ的思考にも開かれたものへと誘う必要性と可能性が考察される。映像によって与えられる知覚的な経験は、現実の直接的な経験に近いものである。また、「今・ここ」を写し取るカメラの特性によって、映像は撮影の直後から撮影者(研究者)本人にとつてもよくわからない部分をはらむ。したがって、フィールドで撮影した映像を視聴することによって、研究者本人が新たな発見をすることも、また他の研究者が、さらには、研究対象となった人びとが何らかの発見をし、研究の主体となることもありうる。映像を媒介とした研究は、このような意外性によって、新しい科学・芸術ともなりうるものなのである。

映像が制作者の想定を越えるところに、さまざまな可能性を持っているということは、手放しに歓迎してよいことではない。両刃の剣であるという認識をもって慎重に取り組む必要性もある。第2章(村尾静二)では、学術映像の制作のプロセスが①制作準備、②フィー

ルドワーク、③ポストプロダクションの3つの段階に分けて解説され、注意点が指摘される。本章を通じて、読者は制作の方法を具体的に知るとともに、撮る側と撮られる側の双方にとって望ましい制作のあり方についても学ぶことになるだろう。

Part IIの制作編では、博物館映像学、霊長類学、植物生理生態学、映像人類学の4つのフィールドにおける映像術が具体的に紹介される。まず第3章（藤田良治）では、北海道大学総合博物館で開催された企画展示のために、大学が所有する練習船と船員の活動を撮影した経験が克明に記述される。博物館は映像との親和性が高く、映像を主体的に活用する潜在力をもちながら、これまでは外部の会社に制作を委ねるなど、充分な活用を果たしてこなかった。そこで筆者は「博物館映像学」を提唱し、「学術映像標本」を収集・保存し、展示や教育、研究から広報まで幅広く映像を活用する方を示す。

第4章（座馬耕一郎）では、チンパンジーを対象とした調査・研究における、ビデオを活用した分析の有効性が示される。まれにしか起こらない出来事も撮影さえできれば何度でも観察が可能になることや、多様な行動を映像によって記録すれば比較研究が可能になることなど、肉眼による観察だけでは困難な研究が紹介される。また、筆者は映像を観察することとあわせて、フィールドにおける直接観察の大切さについても指摘する。

第5章（田邊優貴子）では、長期にわたるインターバル撮影が可能なビデオ装置の開発と、装置を用いた水中調査の過程が詳述され、新発見をなした経験から、動画はダイナミックな動きがある水中世界の調査において、とくに威力を発揮するということが指摘される。また、筆者が研究の道に進んだきっかけが、幼少期にテレビで見た極地の光景にあったことなどを例に、映像によって自然科学の魅力を伝えることの有効性が語られる。

第6章（川瀬慈）では、音楽を生業とする人びとのもとで撮影を始めた筆者が、対象とする人びとに巻き込まれるなかで、外部から客観的に撮影するのではなく、内部において主観的に撮影する方法をとるに至った経緯が描かれる。さらには上映を通じてさまざまな議論に巻き込まれるなかで、多様な意見や感想に触れ、そのことよって研究対象の理解が深まってゆく可能性が示される。

制作編に収録されているコラム1（渡辺佑基）では、野生動物にカメラを付けることで明らかになる動物の生態が、コラム2（中村一樹）では、インターバル撮影よって解明される雲海発生メカニズムが紹介される。また、コラム3（小林直明）では、プロの映画監督の言葉を通じて、魅力的な映像作品の作り方が紹介され、コラム4（伊藤悟）では、人類的なフィールドワークに基づいて制作される「民族誌映画」のフェスティバルの様子が紹介される。

Part IIIの応用編では、フィールド映像術よって生み出されるさまざまなかかわりとかかわりにもなう新たな研究の展開が紹介される。第7章（高倉浩樹）では、人類学者が研究成果を母国と調査地の市民に還元するうえで、フィールドで撮影した写真や動画をういて「展示」を開催することの有効性が示される。筆者は自ら展示を企画・運営した経験から、インスタレーション（空間デザイン）による展示が、来場者の異文化理解を促進し、そこに生まれる交流よって研究が新たに展開する状況を報告する。

第8章（分藤大翼）では、1990年代から盛んになっている「参加型映像制作」が紹介される。デジタルビデオカメラの登場よって、世界各地のフィールドにおいて、撮られる側だった人びとが撮る側にまわるといふ事態が生じている。そして、問題を抱える地

域や組織が、その解決に向けて共同して映像作品を制作するという試みが進んでいる。筆者は、調査地域の先住民組織を中心に、自らが実施している参加型の映像制作を事例に、応用性の高い人類学的研究の可能性と課題を検討する。

第9章（松本篤）では、「8ミリフィルム」の収集・公開・保存・活用を行っているNPOのプロジェクトが紹介される。8ミリフィルムは、昭和30～50年代にかけて一般家庭に普及し、近年では劣化・散逸の危機に直面しているメディアである。まず、上映を通じて収集と公開では、映像が見る者の記憶を喚起し、鑑賞者の中で過去の出来事が共有される状況が示される。そして、保存と活用においては、映像と人がイメージを流通させる媒介となり媒体となるようなアーカイブの構築が、今後の課題として提示される。

本書は、さまざまなフィールドにおいて、フィールドワークが映像術を育み、映像術がフィールドワークを育んでいる状況を明らかにしている。その可能性と課題を共有し、読者の方々が自らのフィールドにふさわしい映像術をみだすヒントにいただければ幸いである。またそのうえで、コラム5（森田剛光）とPart IVの座談会が役に立つことを期待している。